

経済建設委員会会議録

平成25年11月22日	13時00分	開 会
	14時03分	閉 会

網 走 市 議 会

午後 1 時00分 開会

○佐々木委員長

皆様お疲れさまです。

ただいまより経済建設委員会を開催いたします。

本日の委員会は天都山展望台及びオホーツク流氷館の整備事業についての議件 1 件でございます。

初めに、武田観光課参事より整備事業についての概要の説明をお願いします。

○武田観光課参事

それでは天都山展望台及びオホーツク流氷館の整備事業について御説明申し上げます。

本事業は昨年度策定した基本構想に基づきまして基本計画設計を行ってまいりましたが、その概要につきまして御説明申し上げます。

資料につきましては、資料 1 号、資料 2 号の二つを御用意しております。

資料 1 号につきましては概要を記載しておりますが、1 施設の基本方針、2 施設の概要につきましては資料 2 号に詳細内容について記載しておりますので、資料 2 号を中心に御説明をさせていただきます。

資料 2 号 1 ページをごらんください。

初めに、施設の基本方針でございます。

施設の全体コンセプトでございますが、天都山の地名の由来と言われております、天の都に在る心地がする。天都山からの四季折々の景色と冬に一望できる世界最南限の奇跡の流氷を最大限にアピールする。この天都山の場所だからこそ可能な世界にここだけの今までにない施設を考えております。

施設の考え方の基本コンセプトを天都山からの景色そのものを作品とする景色の美術館とし、施設の各ゾーンをギャラリーのイメージで統一することで、施設全体に一体感のある施設を考えております。

なお、景色の美術館は施設の名称ではなく、あくまでも施設コンセプトということでございます。

次に、下のほうに記載しております施設の構成についてでございますが、地下 1 階には景色の美術館の目玉コレクションとして、本物の流氷を展示する流氷幻想ギャラリー、1 階にギャラリーショップと観光情報ギャラリー、2 階に多目的ギャラリーとカフェレストランギャラリー、屋上階には風を感じる展望ルーフギャラリー、と、主に六つの機能で施設が構成されております。

2 ページをごらんください。

目玉コレクションと位置づけている流氷をテーマにした地階の流氷幻想ギャラリーの展開について御説明いたします。

世界でここだけ、いつでも本物の流氷に会い、幻想的な世界を体感できる時空間トリップギャラリーとしております。

テーマ構成ですが、まずはギャラリーの導入部分となり流氷の世界へ誘うウエルカムゾーン流氷の海へ、流氷トリップ体感に驚く流氷の世界体感室、流氷の世界を探る地球の贈り物奇跡の流氷物語、流氷の下に命に出会う流氷下の生きもの、流氷の世界に浸る流氷幻想シアター、という五つのテーマ展開としております。

次に 3 ページをごらんください。

ここからは建物の概要になります。

建設位置についてですが、図面上が網走湖側、図面下がオホーツク海側となります。

新たな施設につきましては、図面右の現在の施設と図面左の第 1 駐車場の間で、現在のアプローチ通路のオホーツク海側の位置となります。

4 ページをごらんください。

各階の平面図となりますが、先ほどと同じく、図面上が網走湖側、図面下がオホーツク海側となります。

初めに、図面上段が 1 階の平面図となります。

図面左、風除室からが施設への入り口となります。

入り口を入り、左側図面では上側にエレベーターと上の階に上る階段、階段につきましては 2 階より上が網走湖側がガラス張りとなっており、ここからの景観も楽しむことができます。

フロア構成につきましては、入り口を入り右側、図面では下側の階段が地階、流氷幻想ギャラリーとの連絡階段となります。

フロア構成につきましては、主にロビー、リアルタイムな情報などを提供する旅のゲートウェイとしての観光情報ギャラリー、ミュージアムショップとして商品構成、レイアウトなど、見る楽しさも感じられるギャラリーショップとなります。

次に下の図でございしますが、地階の平面図となります。

ここにつきましては後ほど詳細に説明いたしますが、流氷幻想ギャラリーのフロアとなります。

引き続き5ページをごらんください。

図面下段が2階の平面図となります。

中央に市民や来館者が気軽にパノラマ景観を楽しんだり、写真展や、本年行いました女性を対象としたセラピーフェスタなど、イベントにも活用できる多目的ホール右側にコーヒーなどを飲みながらパノラマ景観を眺め、いつもと違った時空に浸るカフェレストランの配置となります。

図面左と前方のテラスの部分は、屋上が天井となりますのでカフェや多目的ホールからはパノラマ上の景観が望めることとなります。

次に図面上段ですけれども、屋上階のルーフデッキとなりますが、これにつきましても後ほど詳しく説明をいたします。

延べ床面積といたしましては、地階が831平米、1階が723平米、2階が346平米、屋上階が108平米となっており、合計で2,008平米となります。

続きまして6ページをごらんください。

これはオホーツク海側から見た立面図となります。

多くの面が開口しており、開放感のある建物で外観からも眺望が楽しめる施設であるということがわかります。

高さのイメージですが、屋上階が現在の施設の展望室、一番上の丸い部分になりますけれども、床面と同等の高さとなります。

このことから、オホーツク海側、網走湖側から見たときの建物全体のボリューム感は現在の施設より大きく感じると思います。

次のページをごらんください。

建物外観のイメージとなっております。

外観は周辺景観に配慮し、奇抜なデザインではなく、かつ開放感と展望を楽しむことができる建物であるということを、外から見てイメージできるデザインとしております。

7ページをごらんください。

ここからは流氷幻想ギャラリーと展望ルーフの具体的なイメージを御説明いたします。

このページは、地階の幻想ギャラリーのゾーン全体のイメージとなります。

図面下のウェルカムゾーン「流氷の海へ」となっているところが、1階からのこのゾーンへの階段内の演出となります。

間接照明や照明の強弱を使い、流氷が地下へ向かって流れていくような演出により効果的な誘導を図ります。

階段をおり中央の部分が「奇跡の流氷物語」と「流氷下の生きもの」のゾーンとなっております。

中央の右の部分キュービック状、箱形状の造形物を重ねたところに映像を投影するいわゆるプロジェクションマッピングという技法を使った演出を行い、視覚に訴える仕掛けとしております。

中央左の部分は流氷がもたらす恵みや環境など、主に開設スタッフによるレクチャーにより、来館者の知的好奇心をくすぐるゾーンとなります。

中央の流氷下の生き物ですが、クリオネ、フウセンウオなど種類は現在検討しておりますが、流氷の下不思議でかわいい生き物を見せ方を工夫した流氷水槽で紹介します。

次に、1番左側にあります流氷幻想シアターですが、5面マルチスクリーン、これは正面、左右側面、天井面、床面の5面を使ったものですが、この5面のマルチスクリーンによる演出で流氷

の世界の神秘、幻想、驚き、感動の流水の幻想的な世界を映像詩として紹介します。

最後に、1番右側にあります本物の流水を展示する流水の世界体感室でございますが、流水そのものを見せる、触れるだけではなく、壁面の風景描画や投影、照明、効果音ほかの装置による演出で、流水の風景の1日の移ろいを再現するというところでございます。

イメージとしては、冬のある日、ある人が、鱚浦海岸の流水原の上に立ち、知床を眺めているというシチュエーションで、あさやけ、知床連山からの日の出、けあらし、突然の吹雪、そして吹雪がやみ太陽の光で流水は幻想的なブルーに色が変わり、大鷲、アザラシがあらわれ、夕焼けそして満点の星空、このように、流水の風景の1日の移ろいを体感できる仕掛けにしたいと考えています。

本物の流水を展示している施設はほかにもありますけれども、本物の流水を使って風景を再現、体感できる施設は、世界にここだけの施設と言えらと思います。

以上が流水幻想ギャラリーのイメージですが、本物の流水と映像、光、音などの演出をうまくマッチングさせることにより、これまでと異なる流水の世界を体感してもらう満足度の高い施設にしたいというふうに考えております。

8ページをごらんください。

屋上階の風を感じる展望ルーフのイメージとなります。

中央部分の1段高くなった部分からの眺望は手すりなど遮るものがなく、まさしく風を感じながら眺望を楽しむことができ、ベンチなども設置しゆっくりと景観を望むこともできる展望ルーフとなっています。

この展望ルーフはこの地域に存在するさまざまなすぐれた景観を一望し、まさに天の都にいる心地を体感できる場所となります。

さらに知床、摩周、阿寒などの位置を紹介し、これから行く、または行ってきた旅のプロローグ、エピローグをここでも感じてもらえます。

以上が、施設の基本方針及び建物の概要でございます。

最後に資料1にお戻りください。

概算事業費ですけれども、本体工事15億7,000万円、既存施設の解体工事6,000万円、設計調査5,000万円で、本事業の総体事業費として16億8,000万円と見込んでおります。

以上が天都山展望台及びオホーツク流水館整備事業の概要となります。

○田口観光部長

私のほうから一言補足説明をさせていただきますが、きょう御説明いたしましたお話ですが、本来であればもっと早い時期にお示しすべきだったというふうに考えております。

この時期になり、申しわけなく思っております。

これまでの経過でございますけれども、この基本計画を立てるにあたりましては、ずっと議会議論でもありましたように、コンサルの提案をうのみにするというのではなくて、市としての考え方をしっかりすることが必要であるということ肝に銘じて進めてまいりました。

その上で計画や建物の内容を考えるための一番重要なスタンスとしては、私たちは何を伝えたいのか、どう伝えるのか、どう伝わるのか、体感していただけるのか。

そういうことをしっかり考えた上で進めていかなければならないという、ここが重要なスタンスだと考えております。

また、特にコンセプトをしっかりと構築しなければ、統一感のないものになってしまい、魅力的なものではないというふうに考えておりました、またその内容につきましては、建物の内容についてそのコンセプトを落とし込めることが可能なのかと、そして落とし込んだときに逆にまたそのコンセプトにあうのかという議論を重ねてまいりました。

以上のような基本スタンスでコンサルとのやりとりはかなり時間をかけて行なってきました。

また一方で議論を進めていく段階で、御案内の

とおり国内の資材や人件費など、建設コストの高騰というのが現在生じておりまして、建設コストがどんどんアップして行っているということから、概算費用の積み上げと内容の見直しの行ったり来たりを幾度となく行わざるを得なかったということで、時間がこのようになってしまったということでありまして、いずれにしても事業進捗につきましては、非常にタイトの中で行わなければならないというふうに認識しておりまして、幾つかの行程を今後並行して進めていかなければならないという認識もしっかり持っておりまして、今後精力的に進めていかなければならないというふうに考えておりますので、御理解いただければというふうに思います。

またもう一点、この本件についての業界とのお話でございますけれども、関係者とは個別には終始御意見をいただきながら進めてまいりましたが、観光協会とも本日お示しした内容を御説明させていただきました。

詳細な部分につきましては、施設の規模と観光客の運用の可能性が大丈夫だろうかとか、それに対応する御提案ですとか、建物管理上の注意点とか、それから市民利用の観点からイベントの対応や、それに関わる施設整備、それから、コンテンツの構築に係る場合の専門家の御意見を聞いたほうがいいよというような手法の御提案なのがありました。

ただ全体としては、コンセプトがしっかりしていてギャラリーイメージの統一感があり、また地球環境を伝えるなどと伝えたいことはよいというようなお話もいただきまして、観光協会としては基本的にこの方向で進んでいただきたいということでお話をいただいたところでございます。

私のほうからは以上です。

○佐々木委員長

ありがとうございます。

皆さんのほうから質問等ございましたら。

○小澤副委員長

きょう出てきたばかりということで詳細についてはちょっと見れないところもあると思いま

すが、今ぱっと見て思ったことですが、ずっとこの流氷館の展望台というのは、大曲の湖畔園地との関係性をずっと言ってきたのかなというところがありまして、建物の建つ位置が若干オホーツク海側にずれるということで、展望台からの大曲というものはどのような形を想定されているのでしょうか。

○武田観光課参事

位置関係、展望台の高さにつきましては現在の展望台の高さと展望台の展望塔の床面の高さと同一の高さとなるのが新しい施設の展望ルーフの高さとなります。

ですから高さ的には同じ高さになりますので、オホーツク海側に建物がずれるということになったといたしましても、見え方については変わりはありません。

現在の施設と第1駐車場の間のところにずれるというお話をさせていただきましたけれども、その部分につきましては、現在、木が立っているという形になっておりますけれども、北海道と自然公園法を踏まえ協議させていただきながら、間引きといいますか整理をさせていただくというようなことで考えておりますので、見え方については影響ないものと考えております。

○小澤副委員長

見え方については理解いたしました。

このコンセプトを見させていただきますと、どちらかというとオホーツク海側の展望のほうに力が入っているのかなというイメージを受けたのですが、そういうことでよろしいでしょうか。

○武田観光課参事

360度の展望ということで、どこから見てもいろいろなそれぞれ違った景色が見れるというふうなことで考えおります。

○小澤副委員長

360度の展望ということで理解をいたしました。

今回この基本計画というものが基本設計の部分にあたるのだと思いますが、どうしても使う元金交付金との関係なんかもありますので、スケジ

ジュールの確認をちょっと今後のわかる範囲でよろしいので確認したいと思います。

○田口観光部長

スケジュールの関係と元気交付金のご関係でございますけれども、前回これを御説明させていただきました、これでいいということであれば次の段階の実施設設計になるわけですが、元気交付金が来年度、平成26年度の事業ということでございますので、平成26年度中の元気交付金の事業として建物本体工事を年度内に終わらせ、この施設につきましてはごらんのとおり展示に関してがかなり複雑なことがございますので、そのその後にはやると元気交付金で本体工事をやるということもきめるところはそこで一回終わらせて次元気交付金はあるということで、現在のその工事の進捗の状況も御案内のとおりなかなか難しいところもあるとは思いますが、26年、27年の27年度の半ばを目指して進めてまいりたいというふうに考えております。

○小澤副委員長

限りあるスケジュールの中でやらなければならないということを理解いたしました。

さらにスピードをもって取り組んでいかなければならない案件だということで、このイメージで進めるという形でないとなかなか時間的にも厳しいのかなと思いますが、このメインとなる地下のゾーンについてですが、こちら面積も広いですが、一般の方がどのくらいの時間を使ってこちらのほうを考えてコンセプトにしていくのかというところをちょっと教えてください。

○武田観光課参事

流水幻想シアターの部分でございますけれども、シアターの部分につきましては10分程度、流水体感室、流水の展示の部分ですが、ここにつきましては先ほど1日を体感するというお話もさせていただきましたが3分程度、あとプロジェクションマッピングという技法を使った中央部分のところでございますけれども、その部分につきましては、大体一つのコンテンツが1分から1分半を予定しておりまして、そこを4コン

テンツぐらいを映像で流させていただき、4分から6分で、そのほか解説員による解説をさせていただくということで、この展示室の内容につきましては大体、30分から40分程度を想定しております。

○小澤副委員長

30分から40分程度ということで、これを見ると流水の体感とシアターというのはそこに入って、ある程度人の動きというのはそこでとまるのかなと思いますけど、真ん中の部分で回遊してその流れをつくるというような形の展示の方向だというふうに思いますので、今後、展示する中身だとか詳細な部分を詰めていただいて、どういうふうに人を動かしたら一番効果的とか、たくさんのお客さんが入ったときに対する対応をどこでとるのかというところまで、最後まで詰めていただきたいなというふうに思います。

最後に屋上の関係で、屋上の面積も今までよりも広くなるのかなというふうに感じますが、特に北海道ですので冬季という雪の問題があると思うのですが、今度の新施設になると雪の除雪の関係だとかその辺に対して何か新しいことを考えているかというところを確認させていただきます。

○武田観光課参事

風を感じる展望ルーフの関係ということでございますけれども、当然あの北海道ということで雪の関係が出てきます。

この部分につきましてはすべてを除雪ということするのはなかなか経費等の関係で難しいということでございますけれども、展望の一段高くなったルーフの部分ですね、その部分の一部について除雪をさせていただき、展望ルーフも冬場も使えるような形で、皆さんに御利用していただくということで展望を楽しんでいただきたいと思います。

○小澤副委員長

除雪で対応ということで、なにか施設に新しく例えばヒーティングだとか、融雪だとかそういうことというのは考えていないということで現在

のところよろしいですか。

○武田観光課参事

経費等の問題もありますけれども、今後の実施設計のところで、その辺については詳細を検討させていただきたいと思います。

○小澤副委員長

やはりロードヒーティングなどは、ランニングコストが結構かかるというのはわかります。

そちらと除雪等の人件費との兼ね合いを試算していただけてなるべくだったら安いほう、そして使っていただける方に心地よく見ていただけるような施設になるように計画を進めていただきたいなと思います。

以上です。

○佐々木委員長

そのほかにいかがでしょうか。

○栗田委員

最後にこの件の説明を受けてから半年近くたったのかなって感じがします。その分なかなか苦労された跡が多々見える設計になっているというふうに理解をいたしますが、まず資金繰りが大きく、当初元気交付金云々が出てくる前の話ではいろいろな部分で資金繰りの話が大きく変わってきたことによって多分設計も変わってきたのかなという気はしているのですが、その辺の経過についても一度説明をいただければというふうに思います。

○田口観光部長

元気交付金の活用ということは当初基本構想をつくるというときから比べると、後から出てきた話ということで、当初基本構想を具体的にお話しさせていただいた時には、基本的にこれは公園施設であって公園整備事業の中でやろうという事業手法を考えてきたというのが御案内のとおりだったと思います。

その後元気交付金という事業費の財源が出てきたということで、公園事業で考えていたよりはかなり国費が入るということで、いずれにしても最初から市の負担額というのはあって、それが元気交付金によって非常に縮小されるということ

は事実としてあるということと、一方で基本構想から今回に至るこの内容を詰めてきて、それで内容とコンセプトといろいろやりながらまだまだ概算の段階ではありますけれども、これで詰めていきながら一定の規模に、やはり元気交付金が入るからといっていくら高くなってもいいということはないわけで、そこでのせめぎ合いは非常に厳しいものがありましたけれども、一定のこのクオリティの施設で、また金額についても総体事業費で16億8,000万円ということでそこにおさめたといいますか、そこに至ったという経過であります。

○栗田委員

経過についてはそのようなことだというふうに理解をいたします。

それでは概算の事業費16億8,000万円なのですが、その内訳について元気交付金がどの程度充当されて、市の負担というのはどの程度になるか今わかる範囲で結構ですから説明をいただきたいと思います。

○田口観光部長

この元気交付金の事業ですけども、一般の補助事業と公園事業なり、道路なら道路事業、港湾なら港湾事業でいわゆる補助率という考え方があるものではなくて、交付金の全体額が決まっていますそれをどの事業にあてるか単独事業にあてるということを今回やりますけども、プールと流水館とあと学校の施設というその3本の事業があるんですけども、概念的に補助率があるわけではないので、この3事業全体を足した事業費に20数億円の事業費を充当するという考え方になりますので、予算上は財源を充当していくんですけども、この事業に限って元気交付金をいくらを使うというのはちょっとまた違ったニュアンスになるのかなと、いわゆる補助率というのがないというところが一番今までの考え方と違うというところであります。

○栗田委員

もちろん言っている意味はわかるので補助率の関係もわかるんですけども、この事業に対し

てどれだけその交付金のほうから入れるということがはっきりしないとなかなか事業というのは組みづらいのではないのでしょうか。

○大澤副市長

ちょっと数字的な部分で整理をしてみたいと思いますけれども、まず6月の段階で元気交付金のことについて御説明をしておりました。

当初は元気交付金22億8,000万円というのが平成24年度の補正予算の中で、網走市に配分されるということでお話をしておりましたけれどもそのあと追加の配分がありまして、これは10月の時点では内示があったのですけれども、1億2,000万円ほどふえまして、全体で24億1,000万円が元気交付金で来ますというということで、6月の時点でお話ししてましたけれどもこの元気交付金を活用して三つの事業を行うと、プールと流氷館とそれから小中学校の暖房、こういうふうを考えていました。

今回、プールの基本設計なり、今回の流氷館の基本計画なり、ざくっと数字を積み上げた結果、前回は26億7,000万円ぐらいのトータルの数字になったと思うんですけれども、前の総務文教委員会で御説明したプールの分と、それから既にかかっております暖房の部分とそれからこの流氷館合わせますと全体の事業費が34億2,000万円になります。

そのうち元気交付金が20億1,000万円ですから、市の実質的な負担としては10億円ちょっとということになりますね。

これが6月の時点では、3億9,000万円ぐらいのお話をしたと思いますけれども、当初に話してたやつから、ふえたということでは6億2,000万円ぐらい今回ふえてると。

それはまさに資材費だとか、建設費等々の高騰分だとか、消費税アップの分だとか、それからグレードをいろんな観点から、今回お示した中身に持ってきた結果、当初にお話ししてた部分からは6億2,000万円ぐらいふえたと。

元気交付金をどういうふうに割り振りするかというのは、これはどっちにいても同じだとい

うことにはなるのですけれども、交付金を全部使い切ることがまず第一ですから、順番からいくとプールのほうに厚めにあたるのかなという感じですね。

暖房のやつは別にして、残った分は全部流氷館にきて、流氷館の展示の部分はどちらにしても平成26年度中にはできませんので、その部分は起債なり一般財源を使って整備をしていくというような考え方になろうかと思います。

○栗田委員

詳しい説明をいただきまして、ありがとうございます。

理解はいたしますし、その高騰というのは非常に大変な話だなという気もしますし、この流氷館は以前から我々はいろいろ詰めてやってきた経緯があります。

この元気交付金の事業のおかげでプールというのは新規に出てきた事業で、せっかくつくるのであればよりよいもの、よりこれから活用しやすいもの、もちろん流氷館もある意味ではやはり資金繰りが変わることによって多少設計とかいろいろな部分で変更になって、よりよいものという感覚にはなっているような私は個人的に感じるのですね。非常にそういう設計上の変更も感じるわけですが、以前から公園の整備のときは展望部分については無料ゾーンとかという話もございましたけれども、これは全体を通してこの設備全体が有料ゾーンというとならえ方でよろしいのでしょうか。

○田口観光部長

これも基本構想でお示ししていたとおり、具体的にこの部分で言いますと地階の部分が有料ゾーンということでございます。

1階はロビーがあって、情報コーナーは当然無料ですし、あとギャラリーショップなので2階についても市民の方たちも含めてフリーに利用できる、フリーに景観を楽しめるということがいわゆる公園施設のひとつの位置づけになると思いますので、そこは当然無料ですし、風を感じるルーフギャラリーにつきましても無料ということ

で、ひらたく言うと地階の部分が有料ゾーンになるということでございます。

○栗田委員

では以前とその部分については、コンセプトは変わらないということで理解をいたします。

これからの部分が多々で、これだけ大きく変わってきているので、きょうすぐに云々という話はなかなかならないのかなと思いますが、先ほど部長が言われたように、比較的速やかに設計だとかその辺に入っていくかという時限というか、期限がついているわけですから、その部分も含めて我々の委員会としてもスピードアップして、しっかりやっていかなくてはいけないと認識を踏まえた上で、きょうすぐにどうのこうのという話にならないと思うのですけれども、その辺については委員長どういうふうに。

○佐々木委員長

その辺は皆さんもきょう一読というのはちょっと無理でしょうから、最低でもあと一回、12月議会前までには委員会開きたいと考えております。

○栗田委員

わかりました。

ではそのように進めていただければというふうに思います。

○佐々木委員長

あと、今の時点でほかの皆さん何か質問ありましたら。

○古都委員

最後の展望ルーフのイメージというところで外観ということなのですが、外回りのところに手すり等がついているような感じには見えないのですけれども、安全性というのはどういふふうになっているのでしょうか。

○田口観光部長

これはイメージ図なので、手すりがつかないということは転落防止のためにあり得えないわけで、それで現実的にはそこに当然手すりはつく、せっかくの展望台なのに普通の屋上、上がってみていただいたらわかると思いますけれども、

手すりなりそれから例えば屋上の中央に立つと自分の床面が邪魔になって、景観、下方を邪魔するということが広がる感なくなるということなので中央部分が高くなって、そこに立つと床面も邪魔せず手すりも邪魔せず目の前がすべて景観が見えるということ、天の都に居る心地がするというのを体感していただくということ、つなげているということで、この絵はおっしゃるとおり手すりがないので、このままだとやはり危険なので、しっかり転落防止のことについては考えさせていただきます。

○古都委員

あと、2階平面図にカフェレストラン部分があるのですけれども、これは何平米で現在の流氷館の平米数とどれくらい差があるものか知りたいのですけれども。

○武田観光課参事

2階のレストランの部分でございますけれども、今回カフェの部分に、新しい施設のカフェレストランの部分につきましては、厨房を含めまして約140平米ということになっております。

現在の施設のレストランにつきましては約420平米という形になっております。

○佐々木委員長

ということは3分の1に縮小という形になるのですか。

○武田観光課参事

そうですね、約3分の1ぐらいということになります。

○古都委員

あと、7ページ全体ゾーンで説明を受けた流氷体感室なのですが、先ほどのお話だと照明等で時間帯、日の出、日の入または天気等を表現するというふうにあるのですけれども、現在あるところも流氷が置いてあって、体験室というその寒く設定しているその部屋をとって流氷本物を見てもらうというような感じなのですが、あまりそことの差というのが大きな違いというのは感じないのですけれども、その辺何か大きな違いというのはあるのでしょうか。

○田口観光部長

今お話しいただいたことは非常に重要な点だと思います。

今の施設は当然ごらんになったことがあると思うのですけれども、今までのコンセプトとしては、本物の流氷自体を見せる、流氷自体にさわるといふ、本物の流氷があるよということを見せるということのコンセプトというかそれは従来なかったもので、それはそれで一定の効果があつたなというふうには思っているのですけれども、今回はここをちょっと見ていただいたらわかるのですけれども、デッキ状になっていて、先ほど参事が説明しましたように、ここは流氷そのものを見るのではなくて、流氷の世界に自分が立っているのだということを再現するというその風景の移りを再現するというので、そこに力を入れているということで、今までの流氷を触って下さい、見て下さいということではなくて、この流氷の一日を体感して下さいということが主な目的となっていて、さらにその技法についても、その見え方の演出についても、非常にテクニックを使った部分で、奥行き感ですとか先ほど御説明した一日の移ろいというものを体感していただけるというようなところで、使うものは本物の流氷ということには変わらないのですけれどもやはりここはその見せ方とか、PRの仕方とかプロモーションの仕方とか、そこではコンセプトが全然違ふと、違ふ方向をむいていってるところが違いをはっきりさせなければいけないところなのかなというふうに考えています。

○古都委員

基本設計で上がっている話ですけれども、個人的にはそれだとまだ少し観光という部分でお客さんを呼ぶには少し弱いのではないかなと思います。

ここまで上がってなのですけれども、例えば流氷を本当に浮かべて下から見るような普段見られないところまで見れる部分等々も考えた見せ方、演出等もいろいろ考えていかないと、一回行って満足するではなくて、やっぱりコンセプトと

してはリピーターも獲得しながらふやしていかなければいけないですから、その辺も一回ではなく何回もきたくなるような施設というコンセプトを考えると、もう少し強みを持っていかないとなかなかそこまではたどりつけないのかなと思います。

○田口観光部長

今のお話で、見せ方の問題で工夫しなければいけないというのはそのとおりで、その中で、これまで進めてきた中で今おっしゃった議論というものもあります。

技術的に、物理的に考えればその流氷を水槽の上に浮かべるといふのは、もうとめどなくお金がかかって、ランニングコストもかかってということで、興味を引かなければいけないということはそのとおりだというふうに思いますが、やはり一方でそういう現実的な問題というのありまして、そこはかなり本当にできないのかということとは議論してやりましたけれども、なかなかやはりそのメンテナンスですとか、巨大な水槽ですとか、御存じのとおり流氷は上に浮いてくる部分というのは一部でありまして、そのほとんどが下ですので、そこを下から眺めるため水槽の大きさですとか、海水の中に入れたときに氷が溶けてしまうので、その海水は擬似的には不凍液のような状況にしなければいけなく、それを水槽の中に入れていわけですからその辺の現実的な部分等考えて整理していかなければいけなかったということもあります。

ただ、古都委員おっしゃるとおり、そのような氷の下から見せるとかそういうことはやはり見せていかなければいけないということで、それが現実で見せられないのであればそれは映像の中で見せていかなければいけないということで、その幻想シアターの中で、その5面マルチシアターというようなものもつかって流氷の下にあたかもいるようなところの再現を映像ですということか、そういうようなことで、まあ当然本物の下と本物と映像はあくまでも映像なわけですから。

ただ、そういうようなその見せ方とか、何を伝

えるかっていうところはこのすべて中でいろいろな手法、技法を使いながら伝えていきたいという。

○古都委員

何も全部巨大な水槽ではなくても、例えば、今ガラスとかいろいろなものがありますからそういう透明なものを使ってトンネル状にして上に置くだけでも下から見せる演出というのはいろいろ工夫次第でやり方は可能だと思うので。

そういった部分もいろいろ考えながら、なるべくコストを安く、見せられるような形という体験でやはりそのところについて、そこでないと見れない、感動できないというものをつくるのがリピーターとか観光客の確保につながるので、せっかくつくるならばそういった部分で、例えば全部本物とか、流氷はもちろん本物なのですが見せ方としての工夫の部分でいろいろ考えたりとか、今トリックアートとかありますから、そういう部分をうまく使ったうえでやっていくのももしろいやり方だと思うので、いろいろと研究も続けながら進めていってほしいなと思います。

以上です。

○佐々木委員長

そのほかいかがですか。

○工藤委員

いままで説明等いただきました。

伝えたいこと、そして伝えられるのか、またいかに感じてもらえるか等を軸に計画された、これは非常によくわかります。

しかし、今後とも展示の方法とか映像等、これは進化していくと思うのですね。

ですからこれに伝えたいこととか伝えたい、感じてもらえるにプラスして未来どのように進化していくかもとらえながら、次の展開を考慮していったらいいのかなと。

そして屋上の中でもエレベーター階の上の屋上の価値ある活用がもし見られたら、将来の一つに使えるのかなと感じておりますが、その辺も今でなく考えて考慮の中に入れていただきたい。

そしてまだ本当の展示までに1年以上ござい

ます。その間もいろいろと映像、展示方法はギリギリまで新しいもの、進化を求めていただけたらと思います。

以上。

○田口観光部長

いろいろな運用の仕方については、これから本当にまだまだ考えていかなければいけないところもたくさんあると思います。

それで今、御提案があったエレベーター階のときの使い方とか、その辺ももう少し運用を効率的な有効な使い方というのも描きながら、今後実施設計の中でやっていきたいと思います。

あと映像の話ですけども、私も全くそのとおりだと思っておりまして、先ほど委員からお話ありました何を伝えたいのかということが一番大事なわけであって、ここではたまたまプロジェクションマッピングですとかそれから5面マルチシアターというようなツール、道具は使っているのですけれども、これ売るということではない、例えば日本初の3Dシアターというのは昔フレーズとしてあったのですけれども、それはそれで一定の見せ方としても興味の引き方というツールであって、やっぱりここでは何を伝えたいのか、何を伝えるのかという技法でプロジェクションマッピングなりの5面シアターの技法をつかったということで、そのテクニックにこだわってはいけないとは思っておりまして、今後そのコンテンツを詰めていくことのほうが重要で、それをどう伝えていくかというほうが重要だというふうに考えております。

まさにおっしゃるとおり、今後未来も安定的に技法だけにこだわるとそれはすぐ進化して、4Kの画像はすぐ8Kになってしまうわけで、そこをこだわってはいけないというふうに考えておりますので、御提案を参考にしながら今後もすすめていきたいというふうに考えています。

○佐々木委員長

そのほかよろしいでしょうか。

○山田(庫)委員

委員長から12月の議会前ぐらいにまた議論を

させていただくというお話もいただきましたから、細かい部分についてまたやりとりも見てから、ぜひいいものにするという意味でやりとりをしていただけるということなので、きょうはとりあえず見せていただいて説明を聞かせていただきました。

それで、ただ御説明を聞いて、僕自身もイメージを膨らませて期待も含めてしているのですが、単純に比較をするとしたら例えば先ほどあった流氷の体感室は、今あるやつとの面積、規模的にはどんなふうになるのかな。

シアターというのは今あるシアターがもう少し大きくなってこうなるのだとか、ここはちょっと小さくなってイメージが欲しいのですが、現在の面積と新たに作るものというのはどんな比較ができるのかちょっと細かいことですが、教えていただければと思います。

○武田観光課参事

地階の展示の部分の面積のお話ですけれども、今想定している新たな施設の展示フロアの面積につきましては、約630平米程度でございます。

現在の展示、段で分かれておりますけれども、現在の平米につきましては520平米程度となります。

流氷の体感室の部分につきましては、現在とほぼ同じ約140平米程度になろうかと思います。

あと、シアターの部分についてはだいたい同じくらい140平米ですけれども、現在の施設より少し狭くなるようなイメージでございます。

以上です。

○山田(庫)委員

イメージがなかなかわからないので、この図面見るとすばらしくなるなというふうに思ってしまうので、面積が小さくなるからどうかということではなくて、聞かせていただいてありがとうございます。

それで各委員から出てたように、冒頭、部長から出るのが遅いということの釈明も含めてしていただいて、御苦勞された中でこういうのが出てきたというふうに私も一定の評価をさせていた

だきたいと思いますし、期待もさせていただきたいというふうに思います。

それで細かいことについてはまたさらにいろいろなことを詰めながら議論させていただいて、これからその備品といいますか中に入れる細かいこと含めて、しっかり取り組んでいくということでお聞きをしましたので、例えば今聞けるとしたら、見せ方の工夫というのが非常にいろいろ難しいと思うのですが、ここはやはり最大限いろいろ努力していただく、例えば魚関係をいれる水槽なども前もちょっと意見ありましたが、流氷が入らないのなら流氷に似たものを上において下に泳がすというか、細かいことでいろいろな見せ方の工夫というのはあるのだと思うので、ここはぜひお願いしたいと思いますし、それと建物が国定公園内ということといろいろなあそこはかぶっていると思うので、今度は色の問題というのがいろいろ出るのか、委員会で色まで決める気は私はないですが、このまた色というのもいろいろ制約あるのかなと思いますから、それによってイメージも変わるのかなとこんなふうに思っています。

それで、1点聞きたいのは当初、道立公園の整備とあわせる中で、市民が集える遊び場的なものも外につくるというお話もあったのですが、これ道立公園が今、別に整備進んでいますからそっちとの関係というのはきっと一回なくなるのかなというふうに私自身頭で整理しているのですが、まだこれはここの建物以外の外の部分で外構の部分で、こういう整備のする考え方というのはまだ残っているのですか。

そこちょっと1点聞きたいと思ひまして。

○田口観光部長

経過の中でお話もありました公園の整備事業という位置づけでやりますと、その話は従来からお示ししてこの建物についても公園施設の一つの建物で公園整備事業なので当然周りの外構というか公園整備をどうするかという問題が従来から議論されておまして、その中でだれをターゲットにどういうものを整備するのがよいのかということの中で、運用の中では今、隣接す

る道立オホーツク公園があるわけで、その後オホーツク公園に今、大規模な遊具施設が整備されるということ、その辺がだんだん明らかになってきて、それはやはり一定のインパクトのある施設で、この天都山エリアとして考えたときにはそれはすごく子どもなりファミリーのターゲットゾーンとしてそれは非常に強い施設であると。

一方で、ここの周りでまた小規模な子ども向けの施設をつくったとしても、そこはターゲットがバッティングしてしまうし、そこにはあまり意味がないということもあると。

もう一方で道立オホーツク公園が隣接しているということであれば、この展望台流水館ゾーン、展望台ゾーンだけでゾーニングを考えるのではなくて道立オホーツク公園と連携した整備というものも考えたほうがお互い道立公園側も市側も効率的な整備ができるのではないかということでその部分については、どういう整備をするかというのはあるのですけれども、北方民族博物館の連携というか例えば連絡通路ですとかそういう機能的な連携も深めれば、今のターゲットゾーンとしてかぶっているところの効率的な誘客ということにつながっていくのかなというふうに思っておりますが、当然相手が北海道ということで相手があることなので、こちらのほうではどうしますと今申し上げることはできないのですが、その辺については道立との公園との連携というのはもう既にお話をさせていただいていて、今後そのようなイメージで一体型の整備の仕方ということを、今議論しているところで検討しているところであります。

今こうしますというお示しできる段階にはないので、その方向性で進んでおります。

○山田(庫)委員

私も今部長言われたように、言い方が適切かどうかですけど中途半端なものをちょっとつくるのがいいというふうに思っていないので、これは本当に整備するのかもしれないかも含めて、いろいろ検討されてるようですから、それこそ道立公園、北方民族博物館、監獄博物館、大曲園地も含めた

一つのエリアの今度は核となるような建物ですから、そういう意味では分散しないようにいい意味での相乗効果が生まれるということも視点に入れて考えていかなければならないと思いますので、外構の公園というか全体の公園整備の中の建物という位置づけが理解をさせていただきましたので、委員長言われるようにまた日程を決めてまた細かいことをちょっと質疑させていただければと思います。

以上です。

○佐々木委員長

そのほかございますか。

だいたい皆さんそれぞれお話をいただいたと思いますので、きょうはこの程度で委員会としては終わらせていただきまして、次回ある程度また協議させていただいて、また新しい資料等準備ができるような段階でもう一度開かせていただきたいと思いますので、たしか模型などもつくるような予定があると伺ったのですが、それで間違いなかったでしょうか。そこは難しいですか。

○田口観光部長

ちょっと模型につきましても写真につきましては、ある時期につくったやつをいかにもできているように見えるのですけども、あれは実はできているわけではなくてイメージを伝えるためにそれをデフォルメしながら今回写真でお見せしたということで、できれば、つくりたいのですけれどもやはりかなり時間がかかるものなので、模型ができなくてももうちょっとイメージが膨らむような、資料については成立させていただこうかなというふうに考えております。

○佐々木委員長

その辺はもう少し話を詰めるに十分な状況になりましたら再度委員会を開きたいと思いますのでよろしく願いいたします。

それではそのほか何か理事者側でお持ちでしょうか。

(「ありません」の声あり)

○佐々木委員長

委員のほうからございますか。

○山田(庫)委員

12月前、議会前にして、予定としては3日にまた委員会開催が予定されているようです。

それでそのときでもいいのですが、どういう形の請願が出てくるかまだ締め切りの5日まで見なければならぬとは十分思っています。

いろいろな団体から請願が出てくる可能性もあるのですが、私が言いたいのはT P P問題で、経済建設委員会が所管だというふうに思います。

網走の議会についてはT P Pに対する考え方は今も揺らいでいませんし、臨時議会を開催して、反対決議をした経過もありますので、今の国の動き含めてどういうふうになるかという状況もひとつ見極めなければならぬのですが、経済建設委員会の中で請願がどういうふうに出てくるかというのは見きわめなければならぬのですが、ここの委員会が中心になって、議員提案するかどうかは別にして今回の12月議会の中でもT P Pに対する反対の決議というのはするべきかなと思うので、ぜひ委員長にその辺も受けとめていただいて今、結論出なくてもいいですからぜひ、そういう流れでお願いしたいなど。

○佐々木委員長

その辺のところはこちらのほうでちょっと検討させていただいて進めたいと思います。

そのほかよろしいでしょうか。

(「なし」の声あり)

○佐々木委員長

以上で経済建設委員会を終了いたします。

お疲れさまでした。

午後2時03分 閉会